

## 「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める外国語科の授業づくり

## — 少人数で行う言語活動を工夫した「金山スタンダード・英語Ver.」の作成と活用を通して —

丸森町立金山小学校 佐久間 希

## 概 要

本町には、8つの小学校と1つの中学校があり、全小・中学校で「丸森スタンダード《授業の道しるべ》」に基づいた指導を行っている。新学習指導要領で小学校高学年に導入された外国語科においても、学校や児童の実態に応じた指導方法や言語活動を工夫していく必要がある。

本研究の目的は、少人数で行う言語活動を工夫した「金山スタンダード・英語Ver.」の作成と活用を通し「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める外国語科の授業づくりを行うことである。

## 1 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編では、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標として、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが掲げられている。児童にコミュニケーションを図ることの楽しさを実感させ、主体的に取り組もうとする態度を育成するには、英語を使って相手に対する理解を深めたり自分の思いを伝えたりして、満足感や達成感を味わわせることが大切である。そのためには、コミュニケーションを図る目的や必然性のある場面を設定し、児童自身が相手のことや自分に必要な情報などを「知りたい」、自分のことを相手に「伝えたい」などというコミュニケーションを図る動機が不可欠だと考える。

本校は、各学年の児童数が1～9名という過小規模校である。幼少期からともに過ごし、互いのことを熟知している間柄と言える。そのため、外国語活動で英語を聞いたり話したりすることにおいては、安心して、楽しんで活動しているようである。しかし、小学校外国語科の目標となる「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」を育成するための言語活動<sup>1</sup>については、児童の実態に応じた教師側の工夫や、コミュニケーションへの動機付け等が十分ではなかった。児童に言語活動の目的を明確に示し、意欲を持って取り組ませることができるよう、場面設定や題材の選定、提示の仕方等を工夫する必要がある。

丸森町には、本校同様の過小規模校や複式校4校を含む8つの小学校がある。小学校から中学校への学習の接続を円滑にするために、町内小・中学校で「丸森スタンダード《授業の道しるべ》」を共有し、統一した指導方法や学習習慣の形成を目指している。国語・算数・数学科においては、発達段階に応じた「ノート指導の手引」を作成、活用しているが、外国語活動の指導については、各小学校の各担任に委ねられており、これまで町内での連携は図られてこなかった。新学習指導要領完全実施に向けて、今年度より配置された外国語専科教員と協力し、外国語活動の指導の改善・充実を目指していくことが求められている。

こうした学校や町の課題を踏まえ、本研究では、外国語科の目標を達成するための授業づくりに取り組んでいく。少人数で行う言語活動や指導方法の工夫を「金山スタンダード・英語Ver.」として作成、活用することで、「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める授業をつくりたいと考え、本主題を設定した。

<sup>1</sup> 言語活動：外国語活動・外国語科における言語活動とは、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動である。  
言語活動は、言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別されている。

## 2 主題・副題について

### 2. 1 「『知りたい』『伝えたい』という児童の意欲」について

「知りたい」とは、児童が相手のことや自分に必要な情報、そのために必要な英語表現を「知りたい」と思うことである。また、「伝えたい」とは、自分の考えや気持ち、知っている情報などを、覚えた表現を活用し、他者に「伝えたい」と思うことである。

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編では「児童が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付ける上で不可欠である」と述べられている。「知りたい」「伝えたい」という思いを持って意欲的に言語活動に取り組む姿勢は、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付けることにつながるものとする。そのためには、児童の意欲を高める言語活動、授業づくりを工夫する必要がある。

### 2. 2 「少人数で行う言語活動の工夫」について

少人数で行う言語活動の工夫とは、少人数のデメリットを補い、メリットを十分に生かすことができるような指導の仕方や言語活動を工夫することと捉える。互いのことを熟知している児童同士の場合、時に相手との間にインフォメーション・ギャップが少なくなり、伝え合う必然性があまりない言語活動になることがある。しかし、インフォメーション・ギャップや、しこう・選択の違いが生じるような場面や状況、あるいはタスク（課題）を工夫して設定すれば、伝え合う目的や必然性のある言語活動にすることができる。一方、少人数で行うことのメリットもある。指導者と児童が個別でやり取りをする機会が多く、個に応じた対応やフィードバックがしやすいこと、発言の機会が確保されること等である。少人数だからこそできる、有意義な活動や指導の在り方を探っていきたい。

### 2. 3 「金山スタンダード・英語Ver.」について

本校では、「丸森スタンダード《授業の道しるべ》」にのっとり「金山スタンダード」を作成している。国語・算数科の校内研究の成果や手立てを踏まえ、1時間の授業の流れや、各学習段階でのポイント等が示されており、学年間でつながりのある指導を行うために活用している。これを参考にし、外国語科においても「金山スタンダード・英語Ver.」を作成したい。学校や児童の実態に応じた指導の手立てや留意点をまとめて1時間の授業の流れを作成する。また、児童の意欲を高める言語活動を工夫した単元指導計画を作成し、年間指導計画の中に位置付けていく。そして、授業改善の視点の1つである「主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面」（小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編）の設定・工夫にも、授業づくりの基本として取り組んでいきたい。これらを「金山スタンダード・英語Ver.」としてまとめ、外国語専科教員に活用してもらいながら改善を図っていく。町内の小学校で指導方法の統一が図られることで、中学校への接続を円滑にするための一助になると考える。

## 3 研究の目的と方法

本研究の目的は、少人数で行う言語活動を工夫し、「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める外国語科の授業づくりを行うことである。この目的のために、児童生徒と指導者を対象にした外国語の学習に関する意識調査を実施し、結果を分析する。それを受けて、児童の実態及び指導上の課題改善に向け、「金山スタンダード・英語Ver.」を作成し、実践する。自校での授業実践や、同じように少人数で学習している他校との交流活動等を通して、児童の意識や態度の変容により、本研究の成果と課題を検証する。それを基に「金山スタンダード・英語Ver.」の改善を図り、次年度以降の継続的活用と、他校での汎用を目指す。

## 4 研究の実際

### 4. 1 実態調査

#### 4. 1. 1 調査のねらい

(1) 児童生徒が外国語科の授業に、どのような意識を持って取り組んでいるかを調査することで、「知

りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める外国語科の授業づくりを目指す本研究の方向性と手立ての有効性を考察する。

- (2) 児童及び中学1年生のコミュニケーションへの意欲や態度に関する実態を、指導者としての立場からどのように捉えているかを調査し、指導上の課題や願いを知ること、「金山スタンダード・英語Ver.」の作成に生かす。

#### 4. 1. 2 調査対象

- (1) 丸森町内の第6学年児童（※第6学年児童の在籍がない学校は第5学年児童）
- (2) 丸森中学校第1学年生徒
- (3) 丸森町内小学校外国語専科教員
- (4) 丸森町立丸森中学校外国語科教員

#### 4. 1. 3 調査期日

令和元年5月30日～6月7日及び11月5日

#### 4. 1. 4 調査の方法及び内容

- (1) 質問用紙（選択肢式・記述式）
- (2) 内容

- ① 第6学年児童の外国語活動への意識及び他者とのコミュニケーションの取り方について
- ② 中学1年生の外国語科の学習及び他者とのコミュニケーションの取り方について
- ③ 小学校外国語専科教員から見た児童の実態や指導上の課題等について
- ④ 中学校外国語科教員から見た生徒の実態や小学校での外国語活動に期待すること

#### 4. 1. 5 調査結果及び分析

小学校外国語活動の内容については、ほとんどの項目で「好き」や「まあまあ好き」という肯定的な意識が80%を超える中「英語でみんなの前で発表すること」については、59%と他よりも低い値を示した（図1）。同じ「話すこと」領域でも、[やり取り]よりも[発表]のほうが児童にとっての心理的負担が大きいことが分かる。町内の小学

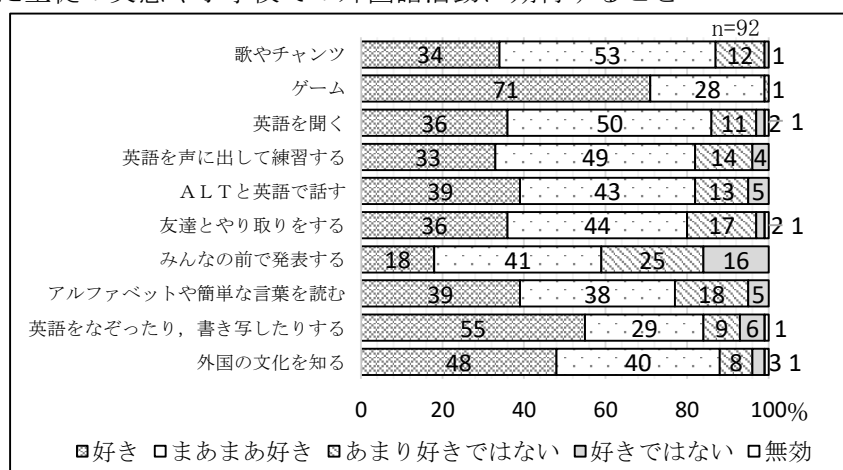


図1 小学生への意識調査の結果「外国語活動の内容について」

校は、複式校・過小規模校・小規模校と、それぞれ規模が異なり、外国語活動を2名の児童で行う学校もあれば、38名で行う学校もある。外国語活動に限ったことではないが、大勢の人の前で話すことに緊張する児童がいたり、たとえ人数が少なくても、使用する外国語の表現に十分に慣れ親しんでいなければ自信を持って発表することは難しいと思われる。そのため、[発表]に対する肯定的な意識が低く表れたものと考え。音声で十分に慣れ親しませる活動を経て、1対1や少人数でのやり取りで自信を付けさせ、発表活動へとつなげるスモールステップの指導計画が必要である。さらに、聞く側の態度も発表者の心情に大きく影響することから、話し手が安心して話せるような聞き手の態度についても、意識して指導していく必要がある。

また、他者と英語でコミュニケーションを取ることにに関する調査では、小学生（図2）、中学生（図3）ともに類似した傾向が見られた。「自分の言いたいことが伝わりやすいように、身振り手振りを交えて話す」ことや、「相手の話を聞いて、言ったことを繰り返したり、質問したり、褒めたりし、言葉に出して反応する」こと、つまり相づちを打ちながら聞くことができていないと自覚している児童生徒が多い。コミュニケーションを円滑にするこれらの要素の活用に関しては、図4のとおり、小・中学校の指導者から見た児童生徒の実態と一致している。このことは、これまでの外国語活動において

コミュニケーションを円滑にする要素を意識させたり、相づちを打ちながら聞かせたりするための効果的な指導がなされていなかったことが要因の1つと考えられる。このことは、先述した「発表」の場面における聞き手の態度とも関わってくる部分である。

これらのことから、「話すこと」の領域において、児童が自信を持って発表できるようにすることや他者とのコミュニケーションを円滑にする要素を活用しながらやり取りできるようにするための指導の工夫が必要と考える。話すことに前向きに取り組ませるには、児童が「伝えたい」と思えるような内容・活動であること、そして相手のことについても「知りたい」と思えるようにすること、つまりコミュニケーションを図る動機付けが大切である。「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を高める言語活動を設定したり、コミュニケーションを円滑にする要素を話し手と聞き手、双方が活用できるようにするための手立てを講じたりして、授業づくりに取り組みたい。

#### 4. 2 指導対策

学校や町の現状、意識調査から明らかとなった課題等を踏まえ、本研究で講じる対策として「金山スタンダード・英語Ver.」を作成する(図5)。

##### 4. 2. 1 年間指導計画《他校との交流活動例》

人数が少ない学級の児童は、限られた相手との言語活動に終始することになる。そのような学習環境でも、児童が他者と外国語を用いてコミュニケーションを図る目的を持ち、それを果たすことで達成感を味わえるような言語活動を工夫したい。児童がコミュニケーションを図る目的として考えられるのは、相手との間にあるインフォメーション・ギャップを埋めることや、人間関係の構築、友達と協力して物事を遂行すること等である。日々の授業の中で、このような点を意識して児童がコミュニケーションを楽しめる言語活動に取り組ませるとともに、学習したことを生かし、普段とは違う相手ともコミュニケーションを図る活動を設定したい。そこで、本研究では、「We Can! 2」(文部科学省)のUnit5「My Summer Vacation」の単元指導計画及び指導案を作成して、単元の終末における言語活動で他校との交流を試みることにした。ごく小さい集団の中で

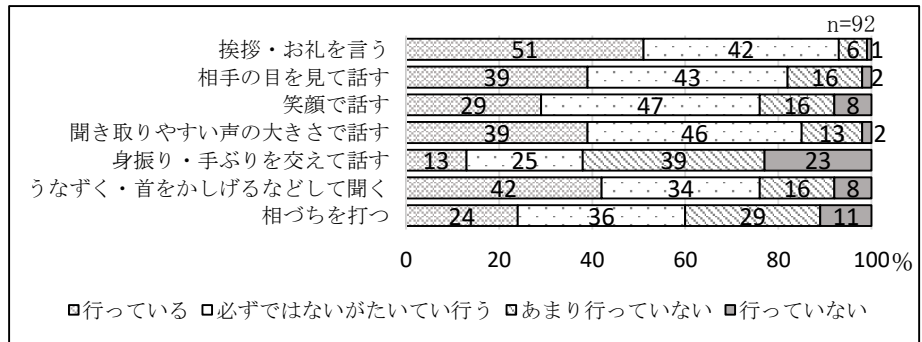


図2 小学生への意識調査の結果「他者と英語でコミュニケーションをとる際に自分が行っていること」

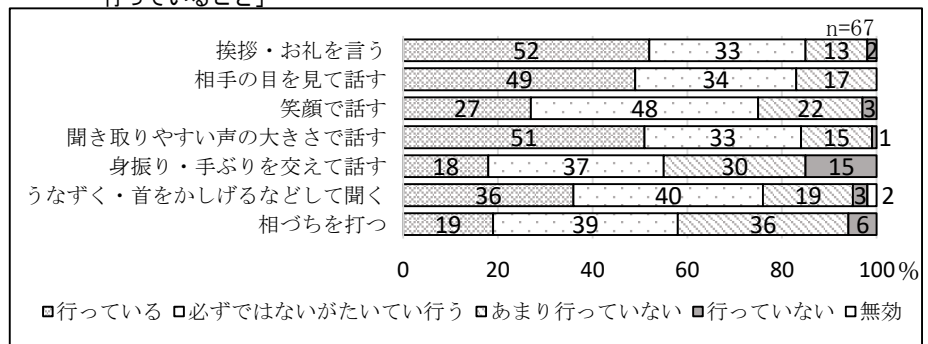


図3 中学生への意識調査の結果「他者と英語でコミュニケーションをとる際に自分が行っていること」

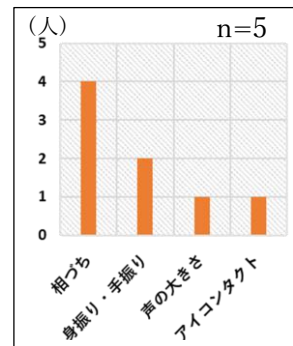


図4 指導者への意識調査の結果  
「児童生徒に特に身に付いていないと思うこと」



図5 「金山スタンダード・英語 Ver.」(イメージ)

育ってきた児童にも、中学校進学を機に新しい人間関係を構築することが必要になる。外国語活動で交流することは、他校の児童との関わり合いを広げる機会にもなる。相手校の6学年児童は、本校と同じく5名で、9月に実施した町内合同の修学旅行で顔なじみである。そこで、単元末の言語活動を「修学旅行の思い出を伝え合おう」とした。中学校でともに学ぶ仲間になるという相手意識を持ちやすく、「相手はどんな体験をしたのか知りたい」「自分の思い出を伝えたい」というコミュニケーションへの意欲を高めやすい活動になると考えた。2年目以降は、学期に1回程度、他校との交流活動を年間指導計画に位置付けて実施したい（表1）。

表1 年間指導計画《他校との交流活動例》

| 学期     | 第1学期                                  | 第2学期                                            | 第3学期                                                               |
|--------|---------------------------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 言語活動   | 自分のことをスピーチしよう                         | 修学旅行／夏休みの思い出を伝え合おう                              | 中学校生活や将来の夢について伝え合おう                                                |
| 主な言語材料 | I'm ～. I like ～.<br>My birthday is ～. | I went to ～. I ate ～.<br>I enjoyed ～. It was ～. | I want to join ～. I'm good at ～.<br>What club do you want to join? |

#### 4. 2. 2 単元構想

各単元において、児童の意欲を高める指導計画を作成するために、図6に示すような単元構想図を用いる。

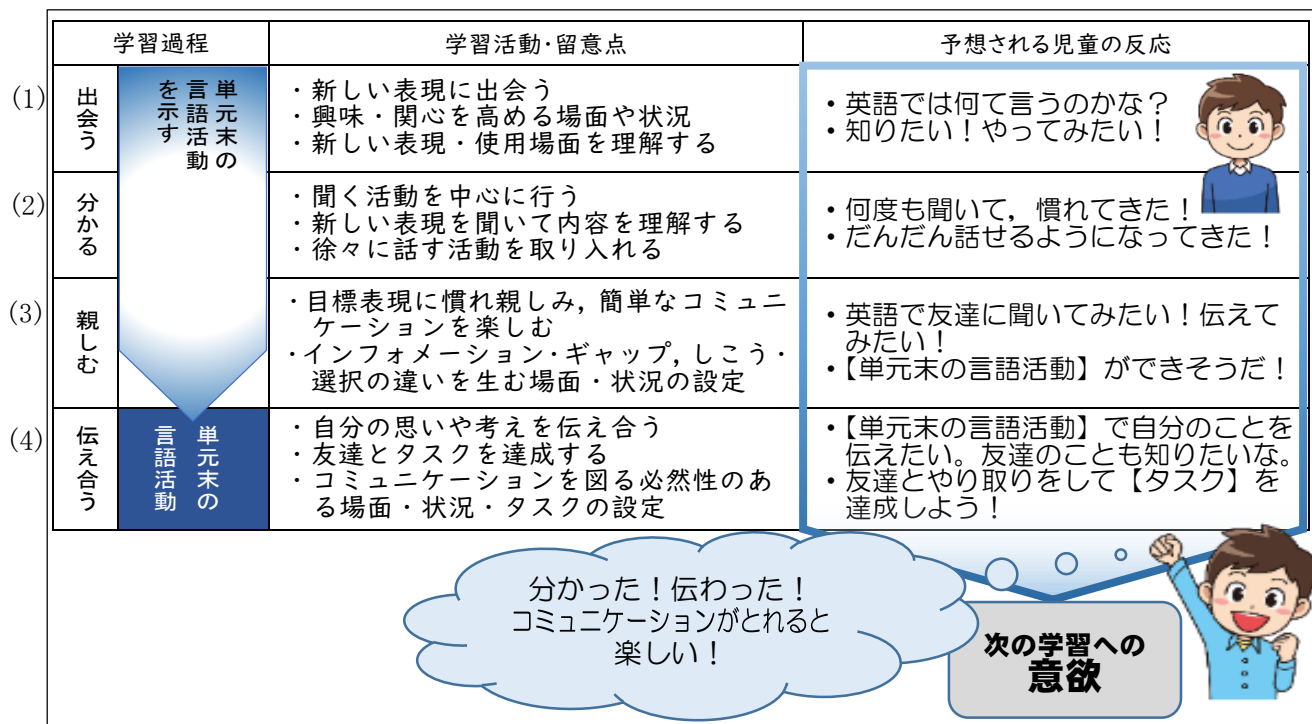


図6 単元構想図

##### (1) 出会う

児童が新しい表現に出会う場面では、視覚教材や実物の提示、ジェスチャーを用いるなどして、音声による導入の仕方を工夫する。単元末の言語活動は、生活場面と結び付けやすい活動やタスク（課題）を設定し、第1時で提示する。

##### (2) 分かる

単元末の言語活動に向けて、「聞く活動」を通して英語の表現や語句に対する理解を深める。耳からのインプットを十分に与えた上で、徐々に「話す活動」を取り入れていき、聞いたり言ったりすることへの自信を持たせていく。

##### (3) 親しむ

友達とやり取りを行う際は、ただ尋ね合うこと以外に、コミュニケーションを図る目的や必然性

のある場面設定を工夫したい。相手との間にインフォメーション・ギャップがある（もしくはインフォメーション・ギャップを作る）こと、個人のしこうや選択による違いがあることなど、少人数でも楽しめる、伝え合う意味がある言語活動になるようにする。意図的にインフォメーション・ギャップのある場面を作るには、例えば、自分以外の誰かになりきって取り組むクイズなどを設定したり、異なる情報が書かれたカードを一人一人に配布し、情報交換することによって達成できるタスクを与えたりするなど、単元で扱う言語材料や単元末の言語活動を考慮して工夫する。

#### (4) 伝え合う

単元末の言語活動では、自分の思いや考えを表現する場面、または、友達と協力し、英語でコミュニケーションを図りながら達成を目指すタスク等を設定することで、児童の「知りたい」「伝えたい」という意欲を高めるよう工夫する。

以上(1)～(4)のような学習過程を経て、児童は最終的な目的やタスクを果たすための知識・技能を習得していく。児童が外国語を用いて意思疎通ができる体験を通してその楽しさや喜びを味わうことができれば、「知りたい」「伝えたい」という意欲を一層高められる。そうした意欲の向上や言語活動を通して得た達成感が、次の学習への新たな意欲や主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度につながると考える。

### 4. 2. 3 少人数のメリットを生かした授業の流れ・指導のポイント

学校や町の課題を踏まえて外国語活動の指導の改善・充実を図るために、表2に示す3つの観点a～cに基づく指導の手立て（Ⅰ）～（Ⅴ）を講じる。

表2 外国語活動の指導の改善・充実のための3つの観点と指導の手立て

|     | 過小規模校における外国語の指導                                                          | 児童の実態把握              | 学習指導要領                                       |
|-----|--------------------------------------------------------------------------|----------------------|----------------------------------------------|
| 観点  | a. 少人数のメリットを生かす                                                          | b. 意識調査の結果から見えた課題の解決 | c. 主体的に学習に取り組む児童の育成                          |
| 手立て | (Ⅱ) 1対1のやりとり・発言の機会の確保<br>(Ⅲ) コミュニケーションを円滑にする要素の指導<br>(Ⅳ) 個に応じた対応・フィードバック |                      | (Ⅰ) STEPS to the GOAL<br>(Ⅴ) 自己分析ができる振り返りシート |

#### a. 少人数のメリットを生かす

少人数で外国語の学習を行う上で、活動形態や相手が限定される等のデメリットはあるが、指導者が個々の学習状況を把握しやすく、児童に発言の機会が多く保障されるなど、メリットも多く考えられる。また、少人数だからこそ可能な言語活動を工夫する余地もある。それらを日々の外国語科の授業に十分生かしていきたい。

#### b. 意識調査の結果から見えた課題の解決

意識調査の結果から明らかになった、コミュニケーションを円滑にする要素があまり身に付いていないということや、発表に対する児童の意欲が低いという課題に対しても、改善を図る手立てが必要である。小学校学習指導要領解説外国語編、第2の2(3)①ウでは、やり取りがある程度継続するための指導（繰り返し、応答、質問）の必要性について、②イでは、身振りや表情、ジェスチャーなど、非言語的要素の重要性について繰り返し述べられている。児童がこれらのコミュニケーションを円滑にする要素を活用し、他者への配慮を伴ったコミュニケーションを図ることができるよう、指導の充実・改善を図り、継続して取り組んでいきたい。他者に配慮する姿勢を身に付けることは、発表の場面においても話し手に安心感を与えるような聞き手の態度を育むための素地になると考える。それによって、やり取りがある程度継続し、コミュニケーションがより円滑になることを実感したり、発表への抵抗感が軽減したりすれば、「できた」「楽しい」という気持ちや、「もっと知りたい」「やってみたい」という意欲の向上につながると考える。

#### c. 主体的に学習に取り組む児童の育成

今回の学習指導要領の改訂において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。そのための視点の1つとして、「主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面」を設定することが挙げられている。単元の学習を見通し、目標に向かって粘り強く取り組む児童、自らの学習状況を振り返り、調整することができる児童を育てるために、本研究でもこの視点に基づいた工夫を行う。

以上 a～c の観点を踏まえた指導の手立てを（Ⅰ）～（Ⅴ）に示す。これらを日々の授業の中で継続的に指導していくために、1 単位時間の流れの中に位置付ける。（補助資料 1）

### （Ⅰ）STEPS to the GOAL

児童の主体的に学習に取り組む姿勢を育てるために、単元の学習の見通しや毎時間のめあてを明示する。単元末の言語活動は、第 1 時で提示した後も「STEPS to the GOAL」（図 7）を使って毎時間提示し、単元を通して児童に意識させる。本時のめあては、その活動に向かってステップアップしていくことを視覚的に実感できるよう、学習内容の段階に応じて示すようにする。

### （Ⅱ）1 対 1 のやり取り・発言の機会の確保

少人数のメリットを生かす指導として、1 時間の授業の中で、児童が指導者（J T E・A L T）と英語でやり取りを行う場面を多く設定する。例えば「挨拶 & 1 Question」として、始業の際に毎回、指導者が児童一人一人と直接やり取りを行う。その他、スモールトーク、チャンツ、言語活動等、1 単位時間の中で、できるだけ行うようにし、児童全員が指導者と英語でコミュニケーションを図る機会を確保する。特に、A L T とのやり取りは必然的に英語を用いる活動になり、ネイティブ・スピーカーと英語で意思疎通ができる喜びを感じる良い機会となるはずである。少人数だからこそできる、その機会を児童に十分に与えたい。

### （Ⅲ）コミュニケーションを円滑にする要素の指導

児童とのやり取りやスモールトークを行う上で、指導者はコミュニケーションを円滑にする要素を積極的に活用し、良いモデルとなるように心掛ける。また、言語活動において必然性のある場面で、適切な相づちや基本的な応答の表現を提示したり、継続的に活用させたりすることで定着を図ることも重要と考える。目標表現だけを使用した形式的な対話ではなく、繰り返し、質問、応答など、対話を継続するための表現を用いたり、相手の目を見て笑顔で聞いたりするなど、場面や状況に応じて他者に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育てたい。

### （Ⅳ）個に応じた対応・フィードバック

児童が指導者と直接やり取りをする場が多く、個に応じた対応やフィードバックを与えることができるという点は、少人数で学習するメリットの 1 つである。児童の気付きや意欲のある態度を褒めたり、改善点に気付かせたりし、適宜に指導や支援を行う。話すこと〔発表〕に対して消極的な児童の割合が比較的多いことから、個別の対応やペアでの活動等を重ね、褒めたり励ましたりしながら自信を持たせて前向きに取り組む姿勢を育むようにする。

なお、指導者からのフィードバックは、個別の指導だけでなく、全体の間でも意識して行う。例えば、言語活動の内容によっては、活動と活動の合間に中間評価を設定することができる。1 回目の活動後にフィードバックを与え、そのポイントを次の活動に生かすようにすれば、児童はより目標とする姿に近付くことができると考える。



図7 STEPS to the GOAL  
（単元末の言語活動・本時のめあての示し方）

## (Ⅴ) 自己分析ができる振り返りシート

児童に自らの学習状況を振り返らせ、把握させることも、主体的に学ぶ姿勢を育む上で重要である。1 単元 1 シートの形式の振り返りシート（補助資料 8）を作成し、各時の終末場面で記入の時間を設ける。振り返りシートには、単元末の言語活動を記入させ、学習の見通しを持って取り組ませるとともに、毎時間の振り返りの観点（評価規準）を記載しておくことで、児童が自らの学習状況を把握するのに有効と考えた。各時のめあてに対する達成度（A・B・C）とその根拠を記述させることで、何が、どの程度できるようになったのか、あるいはもう少しなのかを児童自身が分析できるようにしたい（図 8）。そうすることで、児童が学ぶ楽しさや自分の課題を見出し、主体的に学習に向かう姿勢を育むことにつながると考える。

児童自身の評価・分析と、それに対する教師のフィードバックが記入された振り返りシートは、年間を通して蓄積していく。児童が学期ごと、あるいは 1 年間の学習を振り返り、自身の成長・変容を自覚することができるようにする。

各時間のめあてに対する到達度を自己評価する。（A・B・C）  
※めあてと照らし合わせて、自らの学習状況を把握する。

①（A・B・C）と判断した理由を記入する。  
※自らの学習状況を分析する。  
②分かったこと・考えたことなどを記入する。

6th Grade UNIT5

### My Summer Vacation

Name \_\_\_\_\_

ふりかえりシート

| Do | めあて達成度                          | ① A・B・C…選んだ理由 ② 分かったこと・考えたことなど | 先生 |
|----|---------------------------------|--------------------------------|----|
| 1  | 新しい表現の使い方が分かった。<br>A B C        |                                |    |
| 2  | 夏休みの話を聞き行<br>うことが分かった。<br>A B C |                                |    |
| 3  | 場所やしたこと、感想などを聞いたり言<br>ったりできた。   |                                |    |

図 8 振り返りシートの形式

## 5 実践検証

## 5. 1 所属校での実践

- (1) 実践期間：令和元年 9 月 26 日～11 月 5 日 全 8 時間 （※10 月 15～22 日：臨時休業）
- (2) 対象児童：丸森町立金山小学校 第 6 学年児童（5 名）
- (3) 交流相手：丸森町立小斎小学校 第 6 学年児童（5 名）
- (4) 単元指導計画：別紙参照（補助資料 2～20）

## 5. 2 「金山スタンダード・英語 Ver.」について

## 5. 2. 1 年間指導計画《他校との交流活動》

丸森町の合同修学旅行という共通の話題について、小斎小学校の児童と、ビデオ通話で思い出を伝え合う活動を行った。主な行程・見学先は同じだが、自主研修の内容は各校で異なる。本校の児童同士でも、心に残る場面や伝えたい内容は一人一人異なるため、伝え合う必然性が生まれた。端末機器の画面をスクリーンに映すことで互いに顔を見ながらやり取りを行うようにしたが、音声に若干時差があり、話した後で相手の反応を確かめるための間が生じた。

## 5. 2. 2 単元構想

単元の導入段階では、視覚教材やジェスチャー等を駆使して英語を聞かせ、新しい表現の意味や使用場面を理解させることができた。単元末の言語活動を授業のたびに提示することによって活動への意識を高め、意欲的に取り組む様子が見られた。

新出表現の聞く活動の 1 つとして、「先生方の夏休み（Who am I?）」クイズを行った（第 3 時）。本



図 9 ビデオ通話による交流の場面

単元の目標表現を使って他教員の夏休みの出来事を聞かせ、誰の思い出かを当てる活動である。児童はとても楽しんで取り組み、「(時間があれば)もっとやりたかった。」という声も聞かれた。デジタル教材の人物の夏休みを聞き取る活動よりも、児童にとって身近な存在の人物や話題のほうが、より「知りたい」という意欲が高まるものと思われる。

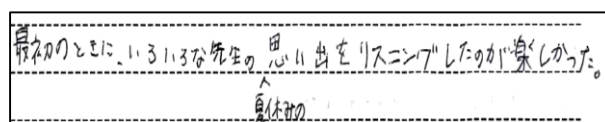


図 10 「聞く活動」を楽しんだことがうかがえる記述

一方で、話す活動については個人差が出やすく、さらにスモールステップを踏む必要があると感じた。チャンツやキーワードゲーム等で慣れ親しんだように思われても、自分のこと(体験や思い)に置き換えて話すことは、児童にとってハードルが上がる。第4時では、児童がそれぞれ夏休みに行った場所を話すという活動を行ったが、「何を話すか」や「英語でどう言えばよいか」という2つの点で悩んだようで、スムーズにできなかった。

コミュニケーションを楽しむ活動として、第5時では夏休みや最近出掛けた場所などについて、第6時では修学旅行の思い出をALTに伝えるという活動を設定した。ここから単元末の交流活動にかけて、児童はどんな思い出を伝えるかを考え、自分の思いを「伝えたい」という意欲を高めながら、話したり書いたりすることに積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。児童の姿が映っている実際の修学旅行の写真を数多く準備したことが、その一助になったと考える。第4時の自分の体験を話す活動で何を話そうかと悩んでいた児童も、たくさんある写真の中から自分が写っているものを選び、その時の思いを想起することができたのだと思われる。みんなで一緒に行った修学旅行だが、5人それぞれが異なる場面を選び、「～を買った(I bought)と言いたい。」などと、未習の表現も意欲的に取り入れて、自分が伝えたいことを伝えることができた。

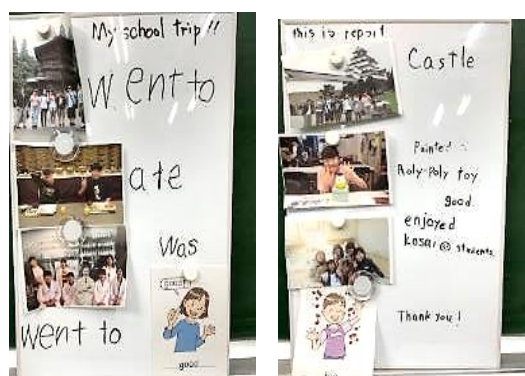


図 11 児童が作成・活用したホワイトボード

### 5. 2. 3 少人数のメリットを生かした授業の流れ・指導のポイント

(Ⅰ)～(Ⅴ)の手立て有効性について、単元の学習後に行った意識調査の結果(図12)を踏まえて検証する。

#### (Ⅰ) STEPS to the GOAL

本時のめあてが段階的にゴールに近付いていることが視覚的にも捉えやすいので、提示された本時のめあてを見て、「もう、ここまできたか。」などつぶやく児童もいた。①の結果から見ても、ねらいに即した効果があったと言える。

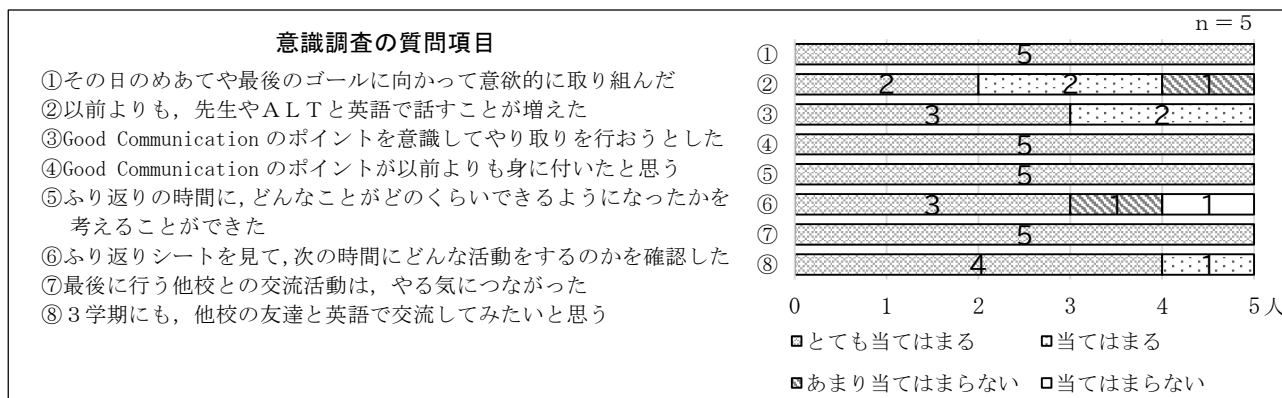


図 12 単元終了後の意識調査の質問項目と結果

#### (Ⅱ) 1対1のやり取り・発言の機会の確保

②の回答には個人差が見られる。「あまり当てはまらない」と答えた児童は、英語を得意とし、以

前から積極的に話すことができていた児童である。「英語で話すことが増えた」と児童自身が変化や成長を実感できるほどではない、または、もともと少人数ゆえに以前との差を感じにくいということも考えられる。しかし、ALTや専科教員と英語で話せる環境を最大限に生かしてあらゆる場面で積極的に英語でやり取りすることや、始業時の「挨拶&1Question」を帯活動としてより充実させることは、ALTと共通理解し、継続していきたい。なお、「挨拶&1Question」は教師と児童が1対1で行うよりも、教師（ALT）対2～3人の児童で行うほうが待ち時間がなくなる上、より自然なコミュニケーションの場面に近付くことに、実践を通して気付くことができた（図13）。



図13 「挨拶&amp;1Question」の場面

### （Ⅲ）コミュニケーションを円滑にする要素の指導

事前の調査では「（コミュニケーションを円滑にする要素を）あまり活用していない」や「活用していない」という内容の回答が見られたが、③④の結果では全員が肯定的な回答に変わっている。

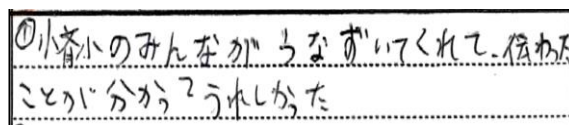


図14 リアクションを示すことの有用性に気付いた児童の記述

さらに、言語活動を通してリアクションを示すことの有用性に気付いた児童もいた（図14）。

### （Ⅳ）個に応じた対応・フィードバック

単元末の言語活動は「やり取り」を想定していたが、実践では「発表」に近い活動となった。事前の調査やこれまでの実態では、発表等の活動に消極的な児童がいたが、学習後の調査からは、交流活動を楽しみ、自信を持って発表できたことがうかがえる（図15）。

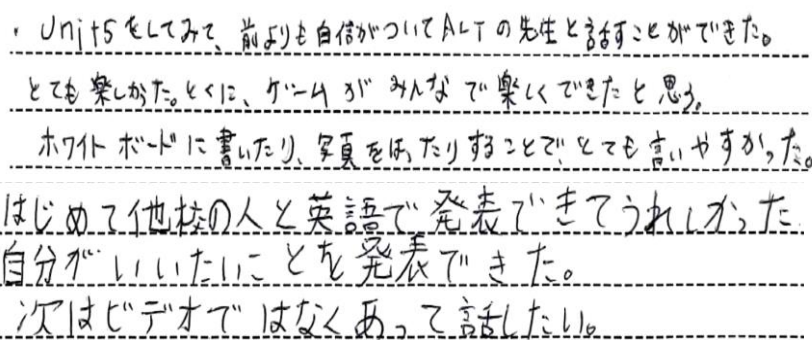


図15 自信を持って話せたことや、言いたいことを発表できたことに満足している児童の記述

### （Ⅴ）自己分析ができるふり返りシート

⑤の結果は全員「とても当てはまる」という回答だったが、「どの程度、どのようにできたか」などという点にまで言及している記述はあまり多くなかった。活動中や振り返りの際に、教師から口頭で自己評価の基準を伝えた時などは、図16のように、自らの課題やよくできた点など、自己評価（A・B・C）の理由を具体的に記述できていた。

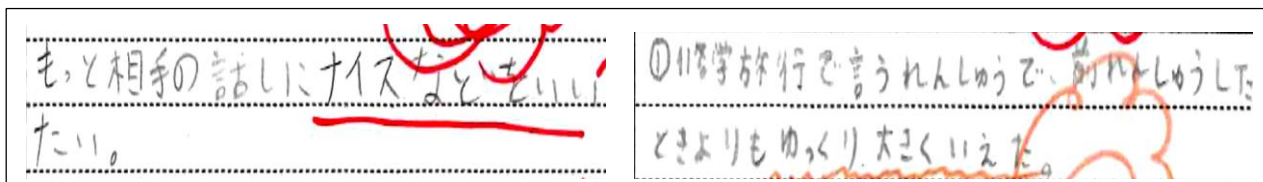


図16 自らの学習状況を分析しているふり返りシートの記述

## 6. 研究のまとめ

### 6. 1 成果

#### （1）単元構想（言語活動の工夫）

「先生方の夏休み」クイズや「真実の口ゲーム」(True or False) など、児童が関心を持ち、知らない情報を聞く（インフォメーション・ギャップがある）活動や、ゲームで勝つために聞いて理

解する必要がある活動などを設定した。また、会津を知らないALTに修学旅行で体験してきたことを伝える活動など、相手や目的を意識させることで児童は意欲的に取り組むことができていた。

## (2) 少人数のメリットを生かした指導

児童が写っている修学旅行の写真を十分に準備したことで、「自分の思い出を伝えたい」という意欲を高めることができた。また、伝えたい内容や表現の仕方等について、個に応じた対応ができたことで、児童は自分が言いたいことを伝えることができ、交流を楽しんでいた。

## 6. 2 課題

### (1) 年間指導計画《他校との交流活動》

新しい年間指導計画に基づき、各学期にどのような内容・方法で交流活動を位置付けるかを吟味する。本校及び相手校の児童からは、「英語で自分の思い出を伝えられ、成長を感じた」、「楽しかったのでまたやりたい」「次は会って話したい」など、肯定的な感想や回答（図12⑦⑧）が得られた。しかし、今回のようなビデオ通話は「やり取り」よりも「発表」に向いていることが分かった。ほかにも、直接会って交流する、事前に録画した映像を活用する、書いたものを交換して読み合うなど、単元の目標や活動内容によって交流の方法を工夫し、専科教員が複数校での指導を担っているという利点を生かすことで、活動の幅を広げる余地があると考ええる。

### (2) コミュニケーションを円滑にする要素の指導

「指導のポイント」として教師が意識することで児童へも意識付けが図られたものの、実際に他者とのやり取りの中で活用し、対話を続けられるようになるまでには時間を要する。児童自身が必要と感じ、「使ってみたい」という意欲を高められる指導を工夫していきたい。

### (3) 自己分析ができるふり返しシート

今回の実践では、A・B・Cの基準を児童に文章で示すことはしておらず、毎回口頭で伝えることも徹底できなかったという反省がある。次年度は、単元の目標に対する評価基準を明示して振り返りや評価を行い、前向きな姿勢で英語の学習に取り組もうとする児童の態度を育てていきたい。

## 引用・参考文献

- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」  
 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」  
 文部科学省（2017）「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」p.23-26. p.77.  
 教育出版（2017）金森強・本多敏幸・泉恵美子編著「主体的な学びをめざす小学校英語教育」p.72.  
 教育開発研究（2011）直山木綿子編著「小学校外国語活動モデル事例集」p.10-24.  
 大修館書店（2018）村野井仁編著「コアカリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識」p.48-52.  
 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2019）「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」  
 光村図書出版（2018）「英語教育相談室」No.4 p.2-5.  
 明治図書（2019）「日々の授業から校内研修・研究授業までフルサポート！ 小学校外国語活動・外国語授業づくりガイドブック」p.11-13. p.127.  
 東京書籍 2年度用小学校教科書のご紹介 NEW HORIZON Elementary（第6学年）  
[https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/eigo/data/eigo\\_keikaku\\_r\\_6.pdf](https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/eigo/data/eigo_keikaku_r_6.pdf)

## 図表等の許諾について

図9, 13は実践授業の中での児童の様子、図10, 11, 14, 15, 16は児童の成果物やふり返しシートの一部などの写真である。児童の氏名を伏せて資料を活用することとし、児童の保護者及び所属学校長からの許諾を得た。